

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

有明や霧の底から川の音

町田市 枝澤 聖文

△評▽有明は夜明けに残る月を言う。川は霧に包まれ、月はひややかに光を落とす。川の音だけの聞こえる幻想的な風景だ。

秋めくや三色ペンの予定表

米子市 永田富基子

△評▽3色使い分けて予定を記す。秋らしい気候になって出かける予定も増えたことだろう。

湯あがりの日のまだ高し藤袴

枚方市 森田美佐江

城跡はいしがみ一つ赤蜻蛉

西東京市 永島 忠

西蔵の死者鳥葬の空澄めり

大津市 星野 暁

小鳥来る一日ひとりのアパートに

飯塚市 白木 小鳩

ひいやりと雷光浴ひせ夜雨去り

稲沢市 橋村 真清

名月や鶴殿の蘆の擦れる音

茨木市 松高 法彦

低山の二つ二つや年の暮

宇都宮市 手塚 康雄

独り身の灯火親しむ日記かな

雲南市 熱田 俊月

西村 和子選

望の月五度も六度も振り返り

志木市 谷村 康志

△評▽ふつうは二、三度だが、句を詠もうとする執着の表れが、実作者の共感を呼ぶ。終止形で止めない点も効果的。

菊脛松山杉山晴れ渡り

東京 山口 照男

△評▽季語は味覚に訴えてくるが、視覚の広がりも体感にも及び。爽快な気分になる句。

虫の音の途絶え不安の広がりぬ

小山市 岸 一泉

パレードのごとく全秋の雲

坂戸市 浅野 安司

月光を汲んでは零す水車かな

出雲市 石原 清司

少年の頃の風来る野菊かな

松阪市 奥 俊

ひとすぢの紫引いて白桔梗

越谷市 安居院半樹

すれ違ふロープウェイや雁渡る

神戸市 田代 真一

三人来てためつすがめつ菊審査

浜松市 久野 茂樹

水の秋城下の道は暮盤の目

小田原市 林 梢

井上 康明選

絶叫とはかくなるものか熟柿落つ

宝塚市 大曲富士夫

△評▽熟柿が落ちる瞬間、作者は思わず絶叫したのだろう。その衝撃の瞬間を語って、地面に飛び散る熟柿を想像させる。

重心を低く低くと草の花

東京 福島 照子

△評▽秋の野に咲く草の花は、膝ほどの高さの花が多く、かがんで欲しいと言っているかのような。渡り来る鶴を仰ぎてまたたかず

下京のビルに谷ある居待月

唐津市 梶山 守

稲刈機唄ふごとくへ前進す

京都市 前田 成規

帰去来の慎爾と好摩ラフランス

北本市 萩原 行博

生身魂母百歳の喉仏

さいたま市 関根 道豊

散骨の話題弾みて小春かな

松阪市 赤塚 弘一

夜食とる進路相談終へしあと

相模原市 はやし 央

秋の蚊のとまる湯浴みの腕かな

土浦市 今泉 準一

火恋し絆創膏を探しつつ

雲南市 熱田 俊月

片山由美子選

干涸びてなほ忘れられ鴉の糞

川越市 益子さとし

△評▽モスは木の枝にさしておいた昆虫や爬虫類を餌の乏しさに食べるといって、放置されたままのものはいさかグロテスク。診察を終へて見上げる首の月

徳島市 長山 敦彦

△評▽病院を出たらもう夕方に。白い月が出ている空を見上げたのは、ほっとしたかだろう。

秋晴や明日開店の太き文字

京都市 佐藤佳代子

爽やかや調律終へし調律師

秋田市 神成 石男

服を脱ぐまで気付かずに草虱

鎌ヶ谷市 海野 公生

寝過ぎては悪夢ばかりやそる寒

大阪市 白濱 素子

職退きて日々新しき秋の雲

池田市 高倉 明子

秋日傘分身のごと手離さず

北九州市 三末 英子

母の忌の秋の簾となりにけり

藤枝市 山村 昌宏

火恋し絆創膏を探しつつ

雲南市 熱田 俊月

ことばの五感

箱舟に乗って

川野里子

わたしたちの定員二名の箱舟に猫も抱き寄す。沈みゆかなむ 睦月都ひよこ豆を買ってきた。瓶に移し大豆と白インゲン豆の隣に置く。豆は水に浸すと軽くなり、3倍に膨らむ。この豆があれは3週間ほどは生き延びられる。しかしどんな時に？ 地震への備えならすべに食べられる乾パンや角砂糖がすでにある。それなのに最近では豆に頼もしさを感じてつい買ってしまふ。豆を水で戻し、のんびり煮るような非常時とはどんなものなのか。カターのドーハ空港で昨年食べたひよこ豆の料理、フムスが素晴らしい美味しかったのを思い出す。スパイスが香りなんとも豊かな味だった。それは飛行機の窓から見たアラビア半島の灰色の砂漠と強いコントラストとなって記憶に残っている。海岸沿いに都市や工場がある他はどこまでも一面に乾燥しきった大地。こんなところで創り出された絶品の豆料理なのだ。何世代にもわたって人々は土夫を凝らし美味しいものを作り生きてきた。豆があれば生きられるそう思った。戦争、自然災害、気候変動、未来へと広がる不安の海を私たちはすでに漂っている。今日届いたメールが明日も届くとは限らず、今年買ったギンナンが来年も実るかどうかは分からない。戸棚の奥には仕詰や蜂蜜、油や米も並べてある。日常、という言葉にすがるように買い集めた食料品だ。この食器棚は小さなノアの箱舟だ。私はすっかりと重い豆の瓶を抱いて少しだけ安心する。しかし誰を乗せ、どこへ着くというのだろうか。(かわのさとこ歌人)